2024年度事業報告

自主事業

自主事業は、ベネッセこども基金が企画・実施している 事業です。こどもを支援するため、志を同じくする 方々と共に5つのテーマに取り組みました。

経済的困難 を抱えるこどもの 学び支援

病気・障がい を抱えるこどもの 学び支援











経済的困難を抱えるこどもの学び支援



(Pick Up)

高校生がカナダのロールモデルと出会える ユース交流プログラムの支援

現状と課題

社会的養護のもとにあるこどもたちは、

自分の気持ちや希望を伝える機会が少なく、

自らがもつ権利や価値に気づきにくい

牛活環境や状況などによって、体験や自己決定などの機会に格差が生まれやすく、学び や成長の機会を逃してしまうことがあります。児童養護施設では18歳で退所しなけれ ばならないところも多い一方で、進路選択についての情報が少ない、希望を伝えづらい といったことから、将来の描き方に悩むこどもも多くいます。

取り組み

カナダの若者と交流するプログラムを支援。

子どもの権利について理解を深め、

自分の声の価値を認識する機会に

児童養護施設のこどもを含む高校生8名が、カナダへ7日間の留 学へ。自分の意見をはっきりと表明し、自己決定していくカナダ の若者の姿を見て、自分の気持ちや考えを表明することが自分の 将来を切り拓くことにつながるという気づきや行動のきっかけと なりました。

※特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン、社会起業家 白井智子氏、NPO法人チャイボラ、現地コーディネーター菊 池幸工氏との協業で実現しました。

子どもの権利

すべてのこどもが主体と してもっている人権。生 存・発達・保護・参加の 権利がある。

子ども アドボカシー

こどもが意見や考えを表 明できるようにサポート すること。

「子どもの権利」先進地域カナダ・トロントでの学びと交流

事前研修

国内にて子どもの権利や子どもアドボカシーについて事前学習。これから 一緒に学ぶメンバーが集合し、チームビルディングを行いました。

カナダ・ トロントへ

子どもアドボカシー活動がさかんなカナダ・オンタリオ州・トロントへ。 トロントの若者たちは、生活環境が何度も変わるといったつらい経験も言 語化し、大人に意見を伝えていました。主体的に人生を歩む姿に刺激を受 けるとともに、悩みや気持ちに共感し、心強く感じる場面も。



オンタリオ州の児童福祉や児童養護制度について 話を聞き、意見交換



フードバンク施設でのボランティア活動にも参加



最終日は学びの集大成として自分の意見を大人に伝える「公 聴会」を実施。これまで人に言えなかった気持ちを初めてオ ープンにできた人も多く、「金銭的な理由で将来の選択肢に 悩む」「夢を叶える道筋を描くサポートを大人にしてほしい」 など、力強い言葉が続きました。

事後研修

帰国後は振り返りとして「子どもの権利」を日常生 活でどう実践するか話し合うワークを実施。「自分 はどう思うか」「なぜそう思うか」など、意見や根 拠を積極的に述べ、活発に議論しました。トロント での経験が着実にこどもたちの力になっています。

√帰国後の声 /-

参加前は子どもアドボカシーのことを知らず、自 分にできるか不安でしたが、現地での活動で自分 の意見を話す力がつきました。帰国後、学校でも 子どもアドボカシーについて調べるプロジェクト を始めました。大学に進学しても世界とのつなが りを意識して学んでいきたいと考えています。

- │帰国後の声 /-

帰国後、自分のいる児童養護 施設で、施設の高校生の声を まとめて職員の人に伝えると いう活動を始めました。





p.8の参加者体験談もぜひお読みください。

○ \ Check / (





よりよい社会づくりにつながる学び支援



(Pick Up)-

公教育での 「ダイバーシティー&インクルージョン教育」の推進

現状と課題

「社会にはさまざまな人がいる」ことを 体感する機会が少ない

日本の公教育では、病気・障がいがある人は別の場で教育を受けるという歴史があります。教育現場の人員不足や、「全員が同じことをする」という教育の形なども背景にあり、ダイバーシティー&インクルージョン教育はなかなか進まない現状があります。 多様な人がいることを体感する機会が少なく、さまざまな違いを受け入れづらい社会をつくる原因の一つとなっています。



取り組み

視覚支援学校に、近隣の中学生が訪問。

「視覚を使わない世界」の体験と、

生徒同士の交流を行う

大阪府教育庁との連携協定のもと、大阪府立大阪南視覚支援学校で以下を行いました。 大阪府教育長 水野達朗さんにもご参加いただきました。

- ●近隣の中学校(和泉市立富秋中学校)の生徒が、 視覚支援学校内で、「視覚のない世界」を体験(約60名)
- ○大阪南視覚支援学校 教職員・保護者が 「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」を体験(約50名)
- ●大阪南視覚支援学校生徒と視覚障がい者スタッフの 対話プログラム実施(約20名)

※本事業は、一般社団法人ダイアローグ・ジャパン・ ソサエティと共に実施したものです。







視覚支援学校での「視覚のない世界」体験プログラム

プログラム内容

- ●目を閉じた状態で道を歩く体験
- ●暗闇での運動会(ダイアログ・イン・ザ・ダーク)
- ●視覚支援学校の授業を体験(体育、理科、社会、国語など)



目を閉じた状態で、白 杖(視覚障がい者が使 用する白い杖)を使っ て点字ブロックの上を 歩く体験





ゴールボール体験 (目隠しをしながら鈴の入ったボールを転がしてゴールに入れることで得点とする球技)。視覚支援学校の生徒と一緒に競技

アンケートでも、多様性を前向きにとらえる生徒が増加

「自分たちとは文化や特徴が異なる人たちと触れ合うことをどう思うか?」という質問に対し、体験後は「わくわくする」「楽しそう」と答えた生徒の割合が増加。また、「障がいのある人について、どのように感じていますか?」という質問でも、体験後は「仲良くしたい」「親しみを感じる」と答えた生徒が増加。多様性を前向きにとらえる生徒が増えました。

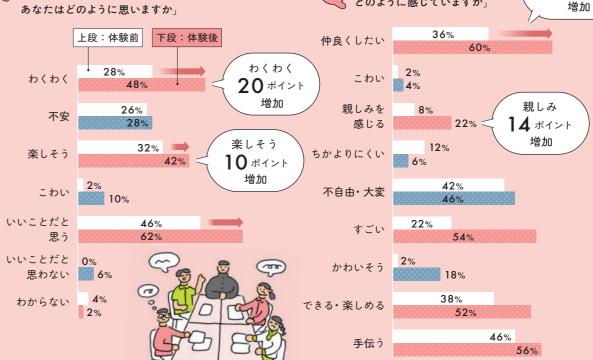
∖参加者の声 /

- ●暗闇の中で相手の仕草や容姿をあまり 気にせずにいられてとてもリラックスでき ました。心地よさを感じました。
- 視覚以外の感覚に集中できて、とても楽しい時間でした。
- ●声を掛け合ったり、触れ合ったりすることで仲が深まりました。



「自分たちとは文化や特徴が 違う人たちと触れ合うことについて、 あなたはどのように思いますか」

「障がいのある人について、 どのように感じていますか」 仲良くしたい **24**ポイント 増加



くわしい実施レポートはこちらをご覧ください。



被災したこどもの学びや育ちの支援

能登でのボランティア派遣による 「こどもの居場所(ぁそび場)運営」

石川県能登半島では、2024年1月の地震と9月の豪雨災害による 二重の被災により、インフラや施設が損壊し、こどもたちの学校や 学童など、安心して過ごせる居場所が大きく失われました。こども たちの日常を少しでも取り戻すために、現地で活動している特定非 営利活動法人エティックと特定非営利活動法人Chance For Allと 連携し、こどもの居場所運営(学び・あそび場の提供)と復旧作業 のボランティアを募集しました。助成団体にも声をかけ、全国から 多くのボランティアが参加しました。

活動概要

実施期間:2024年11月11日~12月27日

参加人数:約30人 活動場所:輪島市

活動内容:午前/現地ニーズに応じた復旧作業

午後/こどもの居場所運営

現場のニーズ

○こどもの居場所の喪失 ○地域内の担い手不足



 \Leftrightarrow

ボランティアの ニーズ

○宿泊や受け入れ情報が不足 ○支援がしたくても、方法が わからず動けない





公益財団法人 ペネッセこども基金

「担い手不足の現場」と「支援したいボランティア」をつなぎ、 双方が安心して活動できる環境を整えました。

○ 能登半島地震

発災:2024年1月1日

最大震度7(マグニチュード7.6)

避難者数:最大51,605名 (2024年1月2日時点)

出典:国土交通省 令和6年能登半島地震における

○ 令和6年奥能登豪雨

発災:2024年9月21~22日 石川県の住宅被害:1699棟 避難指示:114世帯/127人 (総務省消防庁より)



地震と豪雨の影響による被害 (2024年11月時点の写真)



学校帰りのこどもたち30人近くが、居場所に駆けつけてくれました

ボランティア参加者からの声

こども支援に関わりたいという想いから、ボランティア に参加しました。活動を通して、「あそび」がこどもの エネルギー源であり、学びや対人関係を育む大切な土台 だと実感し、視野が広がりました。

現在は休学し、常駐スタッフとして能登で活動しています。被災地や過疎地において、「あそび」を通して自分 たちができることを日々考えています。

一緒に「あそび」や能登の未来を考える仲間も募集中です。 ぜひ能登にあそびに来てください!



神里 響さ∤

沖縄県那覇市出身。現在琉球大学 4年を休学し、能登で特定非営利 活動法人Chance For Allのあそ び場の活動に参加している。



病気・障がいを抱えるこどもの学び支援

病気療養中のこどもへの支援体制について、認知を広げる

特別支援学校における支援制度認知は2割程度

勉強・進学・学校生活…不安ややりたいことがあってもどこに相談したらいいかわからないままあきらめているこどもたちが多くいます。それもそのはず、病気療養のこどもたちを支える「小慢事業」*の認知は2割、自立支援員の認知はわずか3%です。

(病気療養児支援者全国ネットワーク構築に関するアンケート調査より)

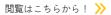
まず「知ってもらう」ことから

病気療養のこどもたちが、自分らしく暮らし学べるために、まず自立支援員の存在を知りつながってほしい、という思いから、自立支援員の認知拡大の取り組みを認定特定非営利活動法人ポケットサポートと共に行っています。

※小児慢性特定疾病児童等自立支援事業(小慢事業)とは長期の療養を必要とするこども たちの健やかな育ちや将来のために、地域ごとに小慢自立支援員やボランティア等がご家 族からの相談や交流活動、必要な情報の提供、関係機関との連絡調整を行う事業のこと。



ライフステージに応じてどんな支援が受けられるのか等わかりやすく紹介しています。2025年度は自治体版をつくって展開中





こどもの安心・安全を守る活動

教育プログラムを、学校などへ無償提供

こどもの安心・安全な環境づくりのための支援プログラムの無償提供を、財団設立当初から実施しています。ネット利用の低年齢化により、学校現場からのネットリテラシー教育へのニーズが高まっています。

たび 保育園・ 幼稚園向け



防災教育紙芝居 「じしんのときのおやくそく」

| 小学校 低学年向け



子どもの安全・安心ハンドブックと 安全教室実施パッケージ

2025年度からはより多くの方に ご活用いただけるように、 デジタルに移行していきます



初めてのスマホ安心ガイドブックと 安全教室実施パッケージ

シリーズ累計 の~約130万部* **※**

※2025年3月時点